

グローバル化する日本の家族の教育戦略

ーハワイでの親子留学の事例からー

五十嵐 洋己 (ハワイ大学大学院)

1. はじめに

グローバル化と新自由主義が進展する中で、家族単位の階層再生産や階層上昇を目指す教育戦略が近年多様化してきている。一つの大きな流れとして、欧米の大学を中心とした高等教育のグローバル化が進み(Marginson 2006)、日本を除く東アジアでは、自国の教育トラックを選択せず、欧米の教育機関への進学を通して英語の能力などを含む「グローバル文化資本」(Iijima 2009)を獲得することを目的とした、ミドル・クラスの国内の枠を超えた教育戦略が近年報告されている(Chee 2002; Huang & Yeoh 2005; Lee & Koo 2006; Waters 2006; Yeoh, et al 2005)。

本研究は、この新しい階層再生産や階層上昇へのパターンを日本の家族が教育戦略の一環としてどのように理解しているのかを検討するものである。このケーススタディとして、アメリカ合衆国・ハワイでの「親子留学」に参加した20人の日本人の母親からインタビューを行った。この家族の階層的基盤や保有する資本、そしてハビテュスがグローバルな教育戦略という差異化/卓越化を生み出しているのだろうか。本研究は、この日本人家族の学校選択を通じた教育戦略を、将来の家族の階層的地位の再生産を目的とした、ブルデューが論じる「象徴的闘争」(1979=1990)と捉え、調査対象者の母親の語りが構築する「象徴的境界」(Lamont & Molnar 2002)を分析することによって考察する。

2. 東アジアのトランスナショナル・ファミリーと日本の「親子留学」

1990年代の日本を除く東アジアでは、トランスナショナル・ファミリーと呼ばれる母親と子どもが欧米諸国へ移住し、夫が自国に残り家族を経済的に支えるという教育戦略のための新しい家族形態が見られるようになった。これらの研究によると、グロ

ーバルな教育戦略を取る動機として、自国の教育トラックの競争が激し過ぎたり(Lee & Koo 2006)、子どもが試験に失敗し地位達成の機会が狭まったため、「セカンド・チャンス」の戦略(Waters 2006)として欧米の教育トラックへの移行をすると議論されている。

近年、日本のトランスナショナルファミリーの形態として、幼稚園や小学生の子どもを持つ日本人の母親が、子どもと一緒に英語圏の国に短期または長期滞在をし、子どもを現地の学校に送って教育を与える「親子留学」が話題になっている。ハワイは代表的な日本人の親子留学の受け入れ先である。ある親子留学を斡旋する旅行代理店によると、2009年の夏休みには、約500組の家族がハワイで親子留学を体験したのだという。

夫の転勤で海外移住をするという「消極的」な理由での子どもの海外の教育トラックへの参入とは異なり、親子留学は夫を残して海外に母親と子どもで渡るという、「積極的」なグローバル文化資本を獲得することを目的とした教育戦略として捉えることができる。この新しいグローバルな教育戦略を取る家族はどういった特徴があるのだろうか。

3. 調査概要

本研究は、2008年3月から2009年8月までの間に、ハワイ州ホノルルに子どもと長期、または短期で滞在している日本人の母親で、3歳から12歳までの子どもを持つ20名とインタビューを行った。サンプリング法はスノーボール・サンプリングを用いた。インタビューでは社会経済的背景を聞く以外に、ハワイにきた理由、子育てに対する考えについて、どのような言説を用い、どのように他者との差異化/卓越化を行っているのかを調査した(象徴的境界)。

4. 調査対象者の概要

20名の調査参加者の内訳として、殆どが専業主婦であり、15名が短期滞在者で、5名が学生ビザや就労ビザ等で滞在している長期滞在者であった。20名の母親と夫の学歴と夫の職業を基に、2つの階層集団が浮かび上がった。文化資本（学歴）が高く、夫が弁護士や大企業勤務または経営者の、アッパー・ミドルクラスに属する母親8名と、文化資本は低い、不動産経営や中小企業の経営者などの、ニュー・リッチの母親の12名である。

5. 2つのタイプの象徴的境界

調査参加者は2つのタイプの象徴的境界を引いていた。1つは、日本の教育と英語を中心とした教育の「教育のタイプ」によるもの。2つ目が、「母親のタイプ」であった。

5.1. 教育のタイプ

調査参加者は海外や国内のインターナショナルスクールのような欧米の教育トラックで子どもが教育を受けることで、(1)EQなどを含むコミュニケーション能力が身につく、(2)自由な環境で教育が受けられ、(3)個性が育ち、(4)外国人や文化に対して寛容（コスモポリタンの嗜好）(Calhoun 1993)になると肯定的に評価していた。上記の3つは本田（2005）が指摘する「ポスト近代型能力」の特徴とおおよそ合致している。それと同時に、日本の教育トラックでは、上記の4点については獲得することが出来ないか否定的であった。

5.2. 母親のタイプ

母親のタイプの象徴的境界は、ニュー・リッチの母親たちの間で顕著であった。彼女達は教育のタイプの象徴的境界の解釈を拡大し、「お受験ママ」と自らを比較し、自分の方が子どもに良い教育を与えていることを強調していた。そして、お受験ママの子どもたちは、IQは高いかもしれないが、コミュニケーション能力が低く、将来を親に決められ自由が無く、個性が無く画一的で、外国の文化に肝要になれず狭い人間になる、と理解していた。

また、ニュー・リッチの母親のうちの数人が、一度は子どもの小学校受験に挑戦したものの、「お受験ママ」たちのとの階層文化の違いや、受験や教育に対しての熱意の違いから諦めた経験を持っていた。

6. 考察とまとめ

ニュー・リッチの母親たちの小学校受験で感じた違和感やお受験ママに対する嫌悪感は、片岡（2009）が指摘をする、近年の日本の小・中学受験拡大とその教育の機会を独占するエリート層が用いている社会的閉鎖性の戦略に起因しているのかもしれない。つまり、ニュー・リッチは日本の小中学校受験への参入に必要な高い文化資本とそれに必要なハビテュスを持ち合わせていないため、経済資本があれば参入可能な、グローバル化によって拡大しつつある欧米の教育トラックへ積極的に参入しつつあるのでないか。また、ニュー・リッチは親子留学などの英語教育に積極的に参加し、「ポスト近代型能力」や「コスモポリタンの嗜好」などの価値に立脚することで、日本の伝統的エリート層と差異化/卓越化をし、グローバル化する社会の中で階層上昇を図ろうとしているのではないだろうか。

以上の、既存の日本のエリート層と、ニュー・リッチ層の「象徴的闘争」については本研究のサンプリングの性質上、仮説という形でしか留めておくことが出来ない。グローバル化が進み英語の必要性が叫ばれたり、多くの日本人が海外へ留学をするようになった今日、この仮説について検証を行うことは、日本人の教育戦略を国際的な位置づけで把握する上で重要である。

また、日本人家族のグローバルな教育戦略が結果的に階層上昇に寄与するかについても今後の研究が待たれる。数名の調査参加者の子どもはハワイの現地の学校で成績が良くなく、日本語も英語の理解も中途半端な状態に陥っていた。このような場合、グローバルな教育戦略が、階層再生産・階層上昇に繋がらない可能性もある。